

マーガレット・ドラブルの世界

——故郷再訪の場面における過去の検証と自己認識の過程——

鈴木 万里

マーガレット・ドラブルの小説世界は、誰もが日常生活の中で遭遇するような些細な出来事やかつてふと耳にした会話、馴染のある情景などを、鮮明に再現している。言わば、同時代人としての生活感覚を共有し得る空間を創り出している現代作家のひとりである。作品の主人公の殆どが女性であり、しかもその年齢が執筆時の作者とほぼ呼応して描かれている点からも、個人的な体験が色濃く反映していることを推測させる。しかし、ドラブルの描く、自由を求めて現状を打開することを夢想しつつも現実から逃れられぬ人間像、或は、親子姉妹など身近な人々との葛藤を通じて自己を再認識していく姿は、単なる個人的体験のレベルに留まらず、我々にとって本質的な問題を含んでいる。即ち、ごく日常的な場面を積み重ねて、人間の自己認識という極めて普遍的な主題を扱っているのがドラブルの小説であると考えられる。

これまでドラブルの作品に与えられた評価を大まかに辿ってみると、まず、初期の小説（1969年 *The Waterfall* まで）に対しては、女性の自立や、生き方をめぐる様々な葛藤に焦点を当てて、フェミニズム的な側面が取り上げられることが多い。例えば、「彼女の主題は、女性が第二の性と呼ばれる世界で、女であることが如何なることであるか、ということである」⁽¹⁾ という E. ローズの言葉が、それを端的に表している。また、最も一般的な評価は、十九世紀リアリズム小説の伝統を受け継ぐ正統的な風俗小説という位置付けである。このコンテキストで必ず言及されるのが、「私は、自分が嘆かわしく思っている伝統の先頭に立つくらいなら、滅びかけてはいても、自分が尊敬する伝統の最後の一人になりたいのです」というインタビューの一節と、彼女のアーノルド・ベネットへの深い傾倒である。この些か挑戦的な発言のために、ドラブルは、二十世紀初頭の実験的心理小説とは敵対関係にあるかのような印象を与えたきらいがある。確かに、感覚や意識のみを追及することで内面世界の現実を描こうとしたウルフとは、その手法において一線を画している。しかし、1970年以降ドラブルは、ある面でかなりウルフに接近していること

が指摘されており、「人生（ベネットの文学）と芸術（ウルフの文学）との融合を目指している」⁽²⁾とも論じられている。また、*The Needle's Eye* (1972)以降の作品では、それまで一人の女主人公の生き方をめぐって展開していた小説世界から、主要人物たちの人間関係を中心に据え、そこに必然的に関わってくる様々な社会のあり様を描くという小説へと変化している。いずれにせよ、人生を模索する人物を描きながら、それを取り巻く社会をも同時に映し出すというオースティン以来の教養小説に連なるという評価は、定着していると言えよう。

1963年から1988年までに十冊を数える長編小説は、個人の内面を扱った初期の作品群から、次第に視野を広げて、主人公をめぐる社会の中の様々な人間模様へと移行している。しかし、登場人物が増え小説世界が多様化しても、ドラブルの描く自己認識には、繰り返し現われる特徴的な型がある。また、作中人物の心理にもある共通項が認められ、様々な変奏を伴いつつ、自己探究の主題と絡み合っている。中でも、故郷再訪の場面、即ち、郷里を離れて都会で暮している主人公が、かつて自分の育った町や家を訪ねて過去と現在に思いを馳せるという情景は、幾つもの作品に描かれ、日常世界を離れて自己と対面し、そのあり方を問う重要な契機となっている。そこで、本稿では、この故郷再訪のパターンとそこに至る自己探究の過程について検討し、ドラブルの小説世界の一端を明らかにする試みとしたい。

作中人物が故郷や生家を訪れて過去と向かい合い、自らを見つめ直すという体験は、*A Summer Bird-Cage* (63年)、*Jerusalem the Golden* (67年)、*The Realms of Gold* (75年)、*The Middle Ground* (80年)、*The Radiant Way* (88年)など処女作から最新作まで繰り返し登場し、作品世界の中心的なイメージのひとつとなっている。そこで、まずそれらを辿って、主要な故郷再訪の場面がどのような背景のもとに、如何に描かれているか、そしてこのパターンがドラブルの小説世界の中でどのような機能を果たしているかについて考察する。

『夏の鳥籠』は、パリに暮していたセアラ・ベネットの帰郷の場面で始まる。彼女は大学卒業後、定職に就かず、結婚して家庭の中に収まる決心もつきかねて、その場凌ぎの仕事で生計を立て、束縛されぬ自由な立場と、自分の人生に開かれている無限の可能性を確保している。しかし一方で、両親の生き方に代表されるような堅実な価値観に対しても強い拘りを抱いており、この

相反する心理傾向ゆえに一種の行動停止状態に陥っている。しかも、自分が目指すべき目標を真剣に模索しているという妥協を許さぬ姿勢に対する誇りと同時に、何をすべきかという決定を先送りして無為に日々を送っている現状に苛立ちと不安を募らせている。このような分裂した心情に揺れるセアラは、姉の結婚式を機に久しぶりに家に戻って来る。彼女を待ち受けているのは、一歩先んじて結婚へと踏み出した姉と、見通しのない娘の生き方に密かな苛立ちを感じながらもその帰宅を歓迎する善き母親である。セアラの家に対する心情は、自らに対する割り切れない思いと呼応するように、相矛盾したものとして描かれている。

I always enjoy arriving home however much I hate it when I get there. Hope certainly springs eternal in the human breast, and I think after every absence that my family will have improved, though it never does. . . . to the bargain comfort of meals provided and beds made, but she [Mother] sees nothing wrong in it all. She doesn't think it's weak to like being looked after, she thinks it's natural, she thinks I'm mad to prefer the dirt and weariness and loneliness that I am prepared to suffer in order to gain a sense of hope. It always takes me a day or two, though, to realize why there is no possibility in my home,⁽³⁾

彼女にとって家は安全で快適な巣であることは否定できないが、整然と秩序立った生活の中にはセアラの抱いている自らの可能性を育む余地はない。その意味で家は希望を閉め出した囚われの場所でもあるのだ。母はその愛情と献身によって、この上なく心地良い生活環境を提供してくれるが、その快適さという呪縛が子供の内的エネルギーにとって如何に大きな脅威となり得るかを認識してはいない。言い換えれば人間には日常生活の簡便さを犠牲にしても切り捨てたくはない何かがあるものだ。が、それは母親の側の論理とは相容れない。従って如何に安楽に暮らせようとも長居はできないことを痛感して、彼女は姉の結婚式が終るや否や再び家を出るための新たな口実を探す。ロンドンで友人とアパートを借りて何か仕事を探そうと考えるが、このような漠然とした見通しでは母親を納得させるのは困難であることも認めざるを得ない。さりげなくロンドン行きを切り出そうとするセアラと、明確な目的意識も持たずにただ家を出て行きたがる娘の真意を計りかねて苛立つ母親の対話は、二人の意識の微妙なずれを興味深く見せてくれる。⁽⁴⁾ 教育が男

性だけのものであった時代に育った母親は、娘たちが十分にその能力を生かして有利な人生を選択できるように熱心に教育した。ところが娘たちの方は、その恵まれた状況を活用しようともせず、ひとは安易に財産めあての結婚をし、もうひとは「何をしたいのかよくわからない」と言いながらも家に寄り付かず、母親の心情を思いやることすらしない。思い余った母親は涙ながらに不満をぶつける。自らの生き方を正当化する十分な理由のないことに後ろめたさを感じているセアラは、母親の尤もな非難に接して動揺し、このまま家に留まってもよいとさえ言う。しかし、ここでこの母娘が共通の理解に至ることがないとしても、母は理性的に娘の意志を尊重しようとし、セアラは母の憤りと悲しみを知ることで自らの生に対する責任を実感したはずである。女性が結婚によって存在証明をする時代が終わって有難いと考える彼女には、本質的な問題の所在が把握出来ていない。確かに多様な価値観が共存する現代では、従来の固定観念に拘束されることなく各人が自由な生き方を選択する可能性をもつようになったに違いない。しかし見方を変えれば、生きることの定型が失われてしまった今日のような時代には、各個人が自らの生きる「型」を作り出さねばならなくなったのである。自由を追求することを許されると同時に、自分で生き方を考え、自らの生きる道を選択決定しなければならないという、かつてない負担を負っていることをセアラは十分に認識してはいない。むしろ、自由の代価として自らの生を独力で個人の責任において創出しなければならない事態に当惑しているようにさえ見える。この後彼女はロンドンで暮しながら自分に相応しい生き方を模索していくことになるが、この作品において主人公の帰郷は原点に戻って自分の置かれた立場を再認識するという意味を担っているのである。

次作『演劇の年』の主人公エマの置かれた状況はセアラとは格段の相違があるが、ドラブルの作中人物に共通する主要な特徴を備えている。それは、両親に対する反発ないしは屈折した感情である。エマの場合は夫との関係に物語の焦点が当てられているので、両親との関わりは希薄であるが、自己滅却的な神学者の父親と肺結核でアルコール依存症の母親が敬愛の対象にならなかったとしても不思議はなかろう。事実、久しぶりに再会した学校時代の友人メアリ・スコットに家族の近況を尋ねられたエマは、母が亡くなって内心ほっとしたと告白している。むしろ、彼女にとってメアリの母親であるスコット夫人こそが代理母のような存在で、その堅実な暮らしぶりと考え方は尊敬と反発の対象であった。エマはかつて何度かスコット家に滞在したが、

ある時いつもとは違う小さな予備室に泊まったことがあった。寝る前にその部屋の引き出しや戸棚を次々に開いてみてすべて空であったのに、ただひとつ、洋服筆筒の最下段の引出しに古いがらくたが一杯に詰まっているのを見付けて仰天する場面がある。この時エマはたとえ本当に骸骨を発見したとしてもこれ以上には驚かなかっただろうと思う。

.... It was a big house, and well-organized, with polished wood and polished floors and carpets, with a drawer for each set of knives and a special place on a special shelf for each jam dish and gravy boat. Usually I slept in Mary's room, but one year, I forget why, I was put in the small spare room. Just before I went to bed on the first night I had a good look round, opening all the drawers and cupboards I could see: they were all empty and neatly lined with spare wallpaper, except for the last one I opened. I had expected to find nothing at all in any of them, but in the last drawer, which was the one in the bottom of the wardrobe, I came across a quite amazing collection of old junk. There were old broken dirty shoes, a greasy old recipe book, bottles half full of patent medicines whose brands no longer existed, a broken bedpan, a large moth-eaten embroidered pincushion, a lot of shoe-trees, some plugs and bits of wire, and two beer bottles. I could not have been more surprised if I had truly found a skeleton.⁽⁵⁾

これほどまでに彼女を驚愕させたのは予想さえしなかった過去との対面であったに違いない。整然と維持された大きな家の中の小部屋の最下段の引出しは、今では意識の表層から忘れ去られた生の幽かな記憶が宿る場所であり、そこに残された古いがらくたはかつて存在した別の時間の確かな証でもあるだろう。この挿話は友人に纏わる子供時代の思い出の断片として描かれているにすぎないが、「最下段の引出し」と「過去との遭遇」は、この後幾つかの作品にも登場し、「故郷への帰還」と共にドラブルの小説世界の主要な場面を構成していくことになる。

この『演劇の年』には「故郷再訪」の変形と考えられるような、もうひとつの体験も描かれている。夫の留守中に恋人のワインダムとドライブに出掛けたエマは、とある村で彼が子供時代によく遊びに来た叔母の家を見ようと誘われ夢中になる。あるじは既に亡くその家は売りに出されていたが、十八

世紀の広大で優雅な邸宅には魅了される。鍵がないので家に入れない二人は裏の窓から中を覗き、庭の奥のワイ川を見に行く。暗い人気の無い静寂の中で、渦巻く川や生い茂る草木などの圧倒的な自然を前にして、エマは動揺する。そして腐った林檎を踏んだ時、林檎が木から落ちて大地で腐っていくところこそが自然の成り行きであり、それを摘み取って食べたり売ったりするようになるのはずっと後の出来事だと感じる。

....It occurred to me that this was the course of nature, for apples to fall off trees and lie and rot in the grass, and that the other thing, the thing with which I was familiar, the picking and the eating and the selling, was a much later development.⁽⁶⁾

即ち、彼女はここで、これまで馴染んで来た人間の日常世界とは異なる原理である自然の摂理に思い至るのである。言い換えれば文化という表層の奥に存在する自然の力を自らの内に見出したということでもあるだろう。小説の最後で、友人のひとりが俳優になるべきか迷った末に川に投身自殺したという知らせを聞いて、エマがかつての自分は彼に似ていたけれども今では二人の子供を持ち、大地にしっかりと根づいていると考えるのも、自然の力に逆らわずに生きて行く姿勢を見出していたからに他ならない。彼女にとってこのワイ川訪問は、日常の時間と空間を離れた別の世界との接点という意味で、「引出し」の挿話と共に自己探究の一過程と見做すことができよう。

第四作『黄金のイエルサレム』のクララ・モームは、ドラブルの創造する人物像に特有の様々な属性や特徴を担っている。ロンドンで大学生活を送っているクララは、故郷であるヨークシャーの町ノーサムとそこに住む母に激しい反発と嫌悪感を抱いている。概してドラブルの小説の主人公たちは殆どが、その出身地や生い立ち、両親など自分の出発点に関わる状況を否定的に捉えていることは極めて注目すべき点であると考えられる。故郷は懐しく思い出す地ではなく、常にそこから逃げ出すべき忌まわしい連想を伴う場であり、両親は慈愛に満ちた保護者というより、偏狭で独善的な価値観を体現している管理者として批判の対象となっていることが多い。従ってそこから何とかして脱出しようとする解放への強い希求が、主人公たちの心理には常に働いている。クララにとって故郷は不毛のイメージそのものであり、休暇で帰るたびに激しい孤独感と夜も眠れぬほどの神経症的な恐怖感に身を震わせ、いくら前に進んでもまた引き戻されてしまうような挫折感に襲われてい

る。彼女を苦しめているのは、結局この町から逃げ出せないのではないか、いずれ力尽きてここに帰って来ざるを得なくなるのかもしれない、やがてまた自分も母と同様に喜びのない一生を送ることになるのではという言い知れぬ不安と焦燥である。そして抵抗を試みる気にもなれずに、何週間もじっと家に籠って新学期が始まるのをしょう然と待つ他になすすべをもたない。卒業後の進路も決めかねていて、家に帰ることだけは絶対に避けたいと思いつつもその手立てが見出せずに思い悩み、一体母は何故自分に帰ってもらいたいのだろうと訝る。このようにクララは故郷に纏わるあらゆる想念を徹底的に恐れ憎んでいるのだが、一方で自らの内に故郷を切り捨てられない何かがあることにも気付いている。自分は自由なのだと言い聞かせつつもノーサムを永久に離れる勇気がないことを認めずにはいられない彼女は、それを母に対する義務感や自己犠牲のためではないかと密かに恐れている。しかし、故郷や母を見捨てられないのは、それらが、彼女自身と同質であり分ち難く結び付いているためなのである。

クララという人間の内部ではふたつの相反する力が激しく闘ぎあっている。ひとつは母親の生き方に集約されるような禁欲的で閉鎖的かつ堅実な価値観に基づく志向であり、もうひとつは自由奔放で輝かしい愛と喜びの人生を追い求める心情である。この矛盾する性向のために、クララは何事に対しても単純な割りきり方をすることができず、否定しながらも心の底では受け入れたり、賞賛しつつも批判的な視線を向けたり、強く求める一方で既に諦めているといった複雑な反応を示す。彼女が子供の頃に読んで最も興味深く感じた「二本の雑草」という物語は、人生における対照的な二つの価値観を提示している。——川岸に二本の草が生えている。一本は長生きを目指してエネルギーを節約して低く目立たぬ草になり、もう一本は全力を尽くして高く鮮やかな草になって、夏の間はお互いに罵り合う。夏の終わりに通りがかりの美しい少女が高く伸びた草を摘んで服に飾るとその草は満足して死ぬ。背の低い草はそれを見て笑い、次の年まで生き伸びる。⁽⁷⁾ ——この寓話が印象深かったのは、一方的な道德観を強制することなく、両義的な解釈を許す可能性を含んでいたためである。それはクララ自身の内に共存する二面的な傾向を表わし、時には極めて屈折した心理へと繋っている。

彼女は人生のあらゆる立脚点を、妥協点の見出せない頑迷な母親との敵対関係に置いているために、稀に母が寛大な態度で優しさやいたわりを示してくれる機会に接すると、自分のこれまでの考え方、感じ方を根底から覆される思いがして、激しく動揺する。例えば、学校時代にパリ旅行の計画を切り

出せずにさんざん思い悩んだ末、恐る恐る相談をもちかけると、予想に反して母はあっさり同意してくれる。それまで喜びとは無縁の重苦しい家庭の犠牲者であることに唯一の存在意義と暗い自己満足を見出していたクララは、それすら母の気紛れによって奪われてしまったことに憤りながらも、母との生活の耐え難さは自分にも責任の一端があるのではないかと危惧せざるを得ない。⁽⁸⁾ 彼女にとって母親は自らの内なる否定的な側面をすべて引き受けてくれるという意味で自己正当化に不可欠の存在である。従って母との間に共感する部分を見出すことは存在原理を揺るがす深刻な事態となり得るのだ。しかし同時に、母親の価値観はクララの中に厳然と根付いているので、故郷を離れて都会で新しい魅惑的な体験をするたびに、母親ならば一体どう思うことだろうと、常に反発してきたはずの旧弊な判断基準によって、批判と羨望の相半ばした複雑な反応を示すことになる。

ロンドンで大学生活を送るうちに知り合うようになったクレリア・デナムとその一家はクララが渴望しつつも決して手に入れることのできなかった世界をまさに体現している。洗練された雰囲気、知性と教養、家族同士のあふれるばかりの愛情と讃美は、彼女を圧倒し、夢中にさせる。これまで父親や母親、赤ん坊は退屈な単調さの象徴としか映らず、姉妹とは憎み軽蔑し合うものと考えていたのだが、デナム家に接してクララはこれまでの常識を根底から覆される思いに囚われ、自分は人生の他の関係についても見誤っていたのかもしれないとまで考える。この一家との友情は新しい輝かしい世界への道を開いてくれるものだった。そんなクララが、クレリアの妻子ある兄ガブリエルとの恋愛関係に入るのは当然であり、むしろ出会う前から恋していたとも言えよう。

ドラブルの描く主人公が異性に恋愛感情を抱くきっかけは、生育環境や価値観の相違であることが多い。つまり、まず相手の人間性に共感して心を引かれるのではなく、自分との異質性に魅せられるのである。それだけ主人公が自己否定的な傾向ないしは強い自意識をもっているということも示している。クララの場合もそれまでクレリアに対して抱いていた憧れと羨望をそのままガブリエルに移し替えて、のめり込んでいく。この兄妹はその容貌、資質、愛情の強さなどあらゆる面で分かち難く結び付いているため、クララがこの新しく見出した恋人によって体験する様々な出来事は、クレリアに導かれて知った世界と同質でありその延長上に位置している。にもかかわらず、ガブリエルの身边には、妹には見られなかった微かな影が纏わっている。驚くほど雑然として汚い家に平然と恋人を連れて帰る不可解な心理や、夫に全

く無関心で神経症的な妻の存在は、完璧な理想を体現していると見えたデナム家の世界の裏側にある大きな歪を思わせる。クララとガブリエルの関係を形作っているのは、我を忘れるような恋愛感情ではなく、むしろ、お互いの存在を通じて自分には手の届かない何かを必死に取り戻そうとする執着である。そしてふたりとも相手そのものではなくより間接的な必要性ゆえにお互いを求めていることを冷静に見通している。しかもそのような言わば共犯関係こそが恋愛以上に正当で必然的な結び付きであると考えているようである。ドラブルの主人公の多くが異質な雰囲気をもつ異性との接触によって自己認識を深めていくように、クララもまたガブリエルとの関係を通じて自分について多くを学んでいく。

母の病気を口実にしてふたりで秘かに出掛けたパリ旅行は、その頂点とも言える体験であるが、学校時代のパリ旅行と同様にクララの意識の中では、母の犠牲のもとに実現していることや、罪悪感と後ろめたい喜びという屈折した感情に裏打ちされていることに注目すべきであろう。クララの行動や心理の背後には常に母親の姿が隠れていて、遠く離れようとすればするほど、強くその存在を意識せざるを得ないのである。それを彼女は次のような言葉で語っている。

....‘I am chased, I am pursued, I run and run, but I will never get away, the apple does not fall far from the tree,’ she said.⁽⁹⁾

クララはこのパリ旅行によって今まで育んでくれた木から自分を切り離したいと思っているに違いない。しかし同時に、たとえ望み通りに木から離れることができたとしても、それほど遠くない場所に落ちるであろう自分の運命をも予測しているように見える。そして、「私には愛がないの。愛そうという意志の塊なの」⁽¹⁰⁾と、ガブリエルに打ち明け、自分が必要としていたのはひとりの男性という人間そのものではなく、その人を通じて他のものの見方、他の存在形態の感覚を求めていた、即ち自己解放の手段として異質の存在を必要としていたのだと悟る。更にはデナム家の家族がお互いに恋していてまるで近親相姦のようだと指摘する冷静な判断を見せている。一方、ガブリエルは、結婚した途端に妹が居ないことが寂しいと分かったと告白し、クレリアを讃美する。そして、家族間の緊密な愛情から逃れるために黄金の巣から自ら出て行って、頭が変になった姉アミリアの話をする。クララはお互いのことを考え合う素晴らしい身内のいるガブリエルを羨ましいと言う。しかし、彼もまたクララとは別の意味で、家族の呪縛によってがんじがらめになってい

ること、デナム家の世界には他人の入り込む隙はないことを無意識のうちに悟ったのではなからうか。無理に入ろうとすればガブリエルの妻フィリパのように打ちひしがれて惨めな状況に陥るか、或は全く無関心な態度をとるしかないであろう。パリを離れる日にクララが眠っているガブリエルを起こさずに一人で帰るのは、彼女が考えているように自己を捨てて人を愛せるようになった証拠ではなく、彼もまた同じように人生において深く傷ついていること、彼女にはそれを癒す術がないこと、そして、自己解放を他人に頼ることが如何に不毛であるかに気付いたからではなからうか。「断念することこそが評価することだ」⁽¹¹⁾ という逆説的な表現は、これまでの執着を捨てることによってそれを越える可能性を示唆しているとも考えられよう。

ひとりでロンドンに戻る時のクララは、過去の心配症の自分と永久に決別できたというつかの間の解放感を味わって満足する。

....And she felt,....that she had perhaps done to herself what she had been trying for years to do to herself: she had cut herself off forever, and she could drift now, a flower cut off from its root, or a seed perhaps, an airy seed dislodged, she could drift now without fear of settling ever again upon the earth.⁽¹²⁾

彼女は、かつてない解放感に満されると同時に、ここでも特有の二面的性質によって、ある種の危険性を察知しているように思われる。自由を手に入れるイメージが、根から切り離された花や大地に落ちることのない種子という、不毛で死に繋がる比喻を用いて描かれている点に注目したい。クララは今まで渴望してきた自由が、自己の否定、即ち死を意味し得ることに気が始めているのである。むしろ、彼女の性質から推測すれば、それが自己の存続を脅かすものであるが故に、より一層解放を熱望していたと言う方が適切であるかもしれない。

ロンドンに帰ったクララを待っていたのは、母の重病を知らせる電報であった。それを見た瞬間、自分が母を殺してしまった、母の死を願うことで殺してしまった、とまるで天罰を受けたかのように感じる。

....She stood there,....and her first thought was, I have killed my mother. By willing her death, I have killed her. By taking her name in vain, I have killed her. She thought, let them tell me no more that we are free, we cannot draw a breath without guilt, for

my freedom she dies. And she felt closing in upon her, relentlessly, the hard and narrow clutch of retribution, those iron fingers which she had tried, so wilfully, so desperately to elude ; a whole system was after her, and she the final victim, the last sacrifice, the shuddering product merely of her past.⁽¹³⁾

母の存在は彼女にとって最大の枷であり、その消滅を何より願っているのだが、一方で、母親はクララの人生におけるマイナス面をすべて転嫁し得る不可欠の要素でもあり、内心その死を秘かに怖れているのである。自分の自由と引き換えに母が死ぬのならば、人間に自由などあり得ないし、罪なくして生きることとも不可能であるとするクララは、母親という桎梏を断つことなど永久にできないことを既に悟っているはずである。

久しぶりに故郷に戻ったクララは、初めて我が家で一人きりになって、今までやり切れぬ思いで眺めてきた様々な身の回りの品と再び向かい合う。そしてこれから本格的な自己探究の旅をする、即ち、自らの内面へと深く降りて行って、これまで直視することのできなかった自分自身と対面することになるのである。まず母親の部屋に入り、母の鏡に映った自分の姿を見てから、小さな容器や箱や引き出しなどを次々と開いて、自分でもよくわからない何かを必死に捜し続ける。ここで「白骨か亡き人の亡霊」⁽¹⁴⁾ という例えが使われていることは、彼女が母の過去における何らかの秘密の存在を確信していることを窺わせる。そして、『演劇の年』のエマと同様に「最下段の引出し」の中に見出したのは、古い練習帳と写真の束であった。クララは、母の娘時代の写真に、これまで一度も目にしたことのない明るく希望に満ちた優しい表情を見出して驚愕する。更に、練習帳に記された詩を読んで、母もまた、彼女と同様に昔は輝かしい世界を求め期待に満ちた日々を過ごしていたことを知るに至って激しく動揺する。

....finally she wandered into her mother's bedroom, and stood there in its emptiness, staring, bemused, at the satin-covered bed. And she felt, as she stood there, that she was facing the room for the first time, no longer averting her own eyes from her own shame before it, no longer blind with vicarious grief, no longer clouded by the menace of her own lack of love.and then she went and sat down at the dressing table, and looked at herself in her mother's mirror. Then she started, methodically, assiduously,

to open all the little pots and boxes, gazing earnestly at rings and hairpins, at bits of cotton wool and old bus tickets, and then she moved on, to the drawers themselves, to piles of stockings and handkerchiefs, still searching, looking anxiously for she knew not what, for some small white powdery bones, for some ghost of departed life. And in the bottom drawer, beneath a bundle of underwear, she found it. She found some old exercise books, and some photographs done up with a rubber band.⁽¹⁵⁾

クララにとって母は自分とは対極に位置する存在でなくてはならなかった。昔の母が、現在の自分と同じように希望を抱いて明るい世界に憧れ、しかも、その後の人生においてあらゆる期待を次々に打ち碎かれ、諦めと挫折と敗残の年月を空しく送って衰弱して死に瀕していると考えるのは到底耐えられなかったのである。悲劇は起こり得ること、誰でも逃れられるわけではないことをクララは知った。そしてそれがまさに母の人生に起こったことも。

O let us seek a brighter world
Where darkness plays no part :

and another started with the verse :

I wait here for my life, and here I must wait
While all the world rolls on and passes by ;
Surely my expectations have a date,
And I will find the answer ere I die?

And Clara, reading this, started to shiver, for she knew that she was reading her mother's life, and that if ever she had needed proof that she had once lived, then this was it. And she turned to the end of the book, and there was the date, 1925 ; before her mother's marriage, before the end of her hopes. And Clara began to cry, for she could not bear the thought of so much deception, of so much disappointment, of a life so eked and spent and drawn and withered away. She would have preferred to believe that hope had never existed, that there had been no error, no waste, no loss, and yet there it lay, in those faded stilted phrases, in

those tenuous and stiffened smiles. It was possible, then, to go disastrously astray ; tragedy was possible, survival was no certainty, there was no reason why anyone should escape.⁽¹⁶⁾

しかし皮肉にも、この衝撃こそがクララに自己認識を促し、解放をもたらすのである。

....and as she fell asleep she noticed in herself a sense of shocked relief, for she was glad to have found her place of birth, she was glad that she had however miserably pre-existed, she felt, for the first time, the satisfaction of her true descent.⁽¹⁷⁾

クララが熱望していた解放とは、母を否定し切り捨てることによって達成されるものではなく、むしろ、母の存在を自らの内に認めて、その母娘の夢と現実を知ることによって初めて実現されるものであった。いわば、彼女は今まで母親を拒否することによって、解放を願いながらも、間接的に自分自身を否定し拒絶してきたのである。ここで母との連続性を発見しその存在を受け入れたからこそ、翌晩、自分があと一週間しか生きられない、したいことがたくさんあるのに、まだ死ぬわけにはいかないと叫んでいる夢を見るのである。クララは、これまでの反発と憎しみを捨てて母を許したのみならず、その失意の人生における幻滅、悲しみ、無念さ、諦めをも理解するまでに至ったのである。ここで初めて母への共感を見出したからこそ、入院中の母を見舞っても却って打ち解けることができない。むしろ母が自分に感情を見せるのではないかとひどく恐れてしまう。この場面でクララはかつてないほど母の存在に近づいているといえるであろう。

ようやく母の呪縛から解き放たれたクララは、同時に、今まで重苦しく心にわだかまっていた故郷の町ノーサムの悪夢からも自由になったことに気づく。

....Clara, ...suddenly wondered if her whole vision of Northam might not after all have been a nightmare, and that the whole city might have been filled with warm preoccupations, a whole kind city shut to her alone, distorted in her eyes alone. And she felt once more charitably towards herself, that she had had no wish to hate ; she had merely wanted to live.⁽¹⁸⁾

クララは、母親や故郷に対する偏見を捨てたのみならず、これまでの自らの

生き方を「憎もうと思ったのではなく、ただ生きたかったのだ」と分析する冷静さをも見せている。彼女がこの帰郷によって得たのは、自分が生れ育った家から自由にはなれない、それは永久に自分の一部なのだという認識であった。しかし逆説的ではあるが、この認識に達した時、クララは初めて自らの偏見と憎しみから解放されたと言えるであろう。恋人ガブリエルは、彼女にとって向上の手段でしかなかった。自己解放への道は、外の世界に脱出することによってではなく、自分自身と向かい合うこと、そして直視に耐えない自己を受け入れることによってこそ、開かれるものであるに違いない。この小説は、母が死にかけていても、自分は生き抜いてみせる、捕まってなるものか、というクララの生への挑戦的な決意で締め括られている。

....Her mother was dying, but she herself would survive it, she would survive even the guilt and convenience and grief of her mother's death, she would survive because she had willed herself to survive, because she did not have it in her to die. Even the mercy and kindness of destiny she would survive; they would not get her that way, they would not get her at all.⁽¹⁹⁾

これはかつての現実逃避的な願望とは異なり、母親の失意の人生とその悲しみを理解することによって、自らの拠り所を見出したクララが到達したひとつの結論であったに違いない。この小説では、母親の死も、母娘の和解の場面も描かれてはいない。クララの体験はすべて内なる認識のレベルにおけるものなのである。『黄金のイエルサレム』は、『夏の鳥籠』や『演劇の年』と同様に、「故郷再訪」あるいは「最下段の引出し」というパターンを取り入れながらも、それが主人公の自己認識の中心的な装置となっている点が興味深い。クララの遍歴は、故郷から遠ざかろうとすればするほど、この「最下段の引出し」に向かって求心的に引き寄せられて行く。母親の部屋の一番下の引き出しの中の下着の束の下とは、心の最も内奥の秘密の場所であり、そこには、過去、現在、未来が凝縮されている。クララは、その秘密を探り当てることによって、過去の持つ意味、現在の自分の姿、そして未来への指針を手に入れたのである。更に、彼女の自己認識は母親の死を契機に初めて可能となったことにも注目すべきであろう。即ち、ある意味で母の犠牲のもとにクララの解放は実現されたのであり、それは輝かしい成果であるというより、むしろ痛ましい体験であったに違いない。

ドラブルの女主人公たちが、自分の生れ育った環境や、親元を嫌悪し、繰り

返し脱出を試みている点について、次のような興味深い指摘がなされている。

また、この時期のドラブルの小説に共通して示されている大きな特徴は、ヒロインたちが自己を形成していく過程で、そろって自分の生まれ育った環境から離脱しようとしている点である。彼女たちの自己形成の出発点は、己れの育ってきた環境の否定から始まるといっても過言ではない。なぜならドラブルのヒロインたちにとって、本来精神の養い親となるべき身近な環境は、逆に彼女たちの精神の飛翔を妨げるものであったからである。

ドラブルのヒロインたちが、脱出し、そこから自己を断ち切ろうとした環境は、一口で言えば既成道徳や独善的正義が支配するイギリスの中産階級と呼びうるものである。その中産階級の社会規範を遵守する人々は、自分たちの信奉する正しい価値観が、独善性と裏腹になっていることに気づかない。ドラブルの小説の場合、このような中流意識につかっただけの既成道徳や独善的価値の信奉者が、ヒロインの親であることが多いので、ヒロインと親との対立や調整が彼女たちの自己確立の大きな問題となるのである。⁽²⁰⁾

しかし、彼女たちは、単に既成道徳や独善的価値観を体現しているがゆえに、両親や故郷から逃れようとしただけではない。むしろ、それらが自らの内にも厳然と存在し、自らを束縛していることに気づいている。だからこそ自由や解放を熱望したのである。

第七作『黄金の王国』以降の作品群では、これまでの閉鎖的な世界から視野を拡大して、より広範囲な人間同士の関わりが扱われるようになる。しかし、ここでも「故郷再訪」の変形ともいうべき極めて個人的な体験が二度描かれ、しかもそれが、主人公のその後の人生にとって重要な契機となっているのは興味深い。

この小説は四人の子供を持つ離婚歴のある優秀な考古学者フランスを中心として展開する。彼女には憂鬱症的な傾向があるが、仕事によって辛うじて精神のバランスを保っている。その一族は遺伝的に同じような気質に悩まされており、自殺、薬やアルコールの中毒、精神病など様々な問題を抱えている人々が多い。フランスの実家も、父は大学副総長、母は名門出身の婦人科医と恵まれた立場にありながら、あまり親しみの持てる雰囲気ではなか

った。ドラブルの他の作品と同様に、ここでも家族や両親という存在が否定的なイメージとして登場していることは注目に値しよう。しかも、クララの被害妄想的な反発とは異なって、フランシスの場合には明らかに何らかの遺伝的な精神障害が想定されているのである。そして、彼女は、人間の環境は人格や性格に大きな影響を及ぼすのではないか、ある土地の土や水が人間の性質を損なうのではないか、自分の家系の遺伝的欠陥は平坦な風景と関連があるのではないかと考える。妹の死、兄のアルコール依存症、父の憂鬱症は、南ヨークシャーや中部地方一帯に不幸な気質を作っている有毒な何かがあるために違いないと推測するのである。更に、自分や子供たちもいずれ狂気に襲われるのではないかと恐れたフランシスは、一族の不幸の源を訪ねるために、祖母がかつて住んでいたトックレイ行きを思い立つ。

子供時代を思い出しながら、今は亡き祖父母の家を久し振りに訪れてみると、家は以前のままあったものの、現在の住人は休暇で留守中のため中には入れない。昔よく遊んだ水路は、汚れて見る影もなくなっていた。彼女はその後、町のホテルに戻って次のように考える。

The pursuit of archaeology, she said to herself, like the pursuit of history, is for such as myself and Karel a fruitless attempt to prove the possibility of the future through the past. We seek a Utopia in the past, a possible if not an ideal society. We seek golden worlds from which we are banished, they recede infinitely, for there never was a golden world, there was never anything but toil and subsistence, cruelty and dullness.⁽²¹⁾

フランシスは、過去を辿ることに意味を見出せないが故に、祖父母の家に入らなかったのである。過去を否定することは同時に未来を拒絶することでもある。「逃れるために動き続けてきたが、人間は何処にも到達しない」⁽²²⁾ という虚無的な言葉や、もはや二人の両親が揃った家族という概念を認めることはできないという考え方⁽²³⁾ は、彼女が生きる上での立脚点を見失っていることを示すものであろう。

しかし物語は彼女に別の展開を用意している。親戚や近隣との交際を断って、トックレイで一人暮らしをしていた大叔母のコニーが餓死して数カ月経って漸く発見され、センセーショナルな新聞記事として取り上げられ、甥に当たるフランシスの父フランク・オルレンショウが窮地に陥ってしまう。葬式や遺言などの事後処理のためフランシスは再びトックレイに赴き、コニーの

住んでいた家をひとりで訪ねていく。ここから「過去」への旅が始まることになる。家の中は予想したほど乱雑ではなく、自然に包み込まれたひっそりとしたたたずまいに、彼女は家庭にいるような安らぎさえ感じる。各部屋を見て廻り、あたりが薄暗くなってきた頃、鍵を見付けて黒い引き出しを開けて見ると、そこにはオルレンショウ家のささやかな歴史を物語るような様々な記録や物がぎっしりと詰め込まれていた。ここでフランシスは一族の過去を発掘して、その盛衰に思いを巡らせ、以前祖母の家で見出そうとした自らの源を確認するのである。そして誰も知り得なかったコニーの隠遁生活の個人的な事情も明らかになる。若い頃の美しい写真、手紙、記録などから、妻子ある水夫との恋愛、出産、子供の死、精神病院への入退院、恋人の事故死という一連の出来事を知るに至る。静寂と暗闇の中でフランシスは、不思議にもくつろいだ気分で、この家に住んでもよいとまで考え、立ち去り難く思う。⁽²⁴⁾ この時彼女は、過去と対面し、生前会うこともなかった身内の生き方を知り、それに心から共感することによって、今まで心を苛んできた一族の呪縛から解き放たれたのである。

更には、コニーを埋葬した後、意外にも父親フランクが子供時代の思い出を語り、自分の育った家を見に行こうと提案して、一族で訪ねるのも、過去を検証する一過程と言えよう。以前フランシスが一人で行った時には住人が留守で中には入れなかったが、今回は予め連絡して歓迎を受ける。彼女は、昔よく遊んで今では汚れてしまった水路を、恋人カレルと共に見に行って、二人で転んで泥まみれになる。ここでフランシスは子供の頃の感覚を、大地との一体感を半ば取り戻したに違いない。しかし、これでオルレンショウ家の不幸な運命が払拭されたわけではない。この後、精神の平衡を失っていた甥が幼い娘を連れて自殺し、一家は激しく動揺する。やがて、フランシスは故郷のプラハを訪ねるカレルに付き添って行き、彼の過去を辿る旅を共に体験する。小説の最後で、彼女がコニーの家を父親から買取り、ロンドンを引き払って子供たちやカレルと移り住むのは、一族の様々な不幸にもかかわらず、それらを受け入れ、その後継者として家族を守っていこうとする決意を表すものであろう。そして、その契機となったのは、やはり「故郷再訪」と「引き出しに隠されていた過去との対面」であった。

『黄金のイエルサレム』のクララにとって、家族の呪縛が、被害妄想や母親への強い反感というごく個人的な意識のレベルにおけるものであったのに対して、フランシスの場合にはより深刻であり、それは、一族に頻発する狂気の兆候という具体的な形をとって現われている。しかし、彼女もクララと同

様に、過去を知りそれを受け入れるという過程を経て、自らの生き方を捜し当てるのである。クララは、最後の場面で、故郷を離れ、ロンドンへ戻るために恋人に迎えに来てもらう相談を電話でしている。フランシスは、逆に、ロンドンを後にし、子供たちや恋人と共に一族の故郷に落ち着く。二人は同じような体験を経て、対照的な結論に到達するのだが、いずれも肉親や身内の死が転機となっていることは興味深い。過去との接点は、身近な人の死という代償を支払って漸く達することのできる特異な痛ましい経験として描かれているのである。

第九作『中間地帯』の主人公ケイトもまた、故郷や両親に対して屈折した心理を見せているが、その上、子供に対しても複雑な感情を抱いている点は、新たな展開と言えるであろう。彼女は、ドラブルの登場人物としては珍しく労働者階級の出身であり、父親が地域活動にも熱心で、そのために学校では肩身の狭い思いをした。そんな彼女が、自分の家とはまるで雰囲気の違いアームストロング家に夢中になり、画家志望のスチュワートと結婚することになるのも当然といえよう。ドラブルの小説において、異性に惹かれるのは自分の家にはない魅力のためであることが多い。しかしこの結婚はすぐに破綻を迎える。生活力のない夫を諦めたケイトは、ジャーナリストとして成功を収め、三人の子供を育てる。彼女は子供以外には誰も愛したことがないと思うほどに子供に対して激しい執着を持っており、新しい恋人を求める理由は、そうしないと子供たち、特に長男に一層頼ることになってしまうという恐れのためであった。そして、ケイトは、自分が両親に対して持っている複雑な感情を、やがて子供たちも彼女に持つようになり、彼女を拒否するのではないかと恐れている。つまり、両親へのこだわりから逃れられないが故に、自分の母親としてのあり方についても不安を拭い去れないのである。『中間地帯』とは、親と子供の存在に挟まれた抜き差しならぬ状況を指しているであろう。そして、このケイトも、取材の仕事で故郷を再び訪ねることになるのである。

午後に母校を訪ねる約束のケイトは、午前中に生れ育った町ロムレイを歩き回る。再建計画のため町は変わっていたが、駅や昔よく遊んだ下水路の土手はそのまま残っていた。彼女は子供時代を思い出しながら土手を歩き、夫や両親など身近な人々のことを改めて考える。今では笑って許すことを学んだので、パラノイアの父親と広場恐怖症の母親という考えを一笑に付すこともできるだろう。しかし意識してはいなかったとしても、心の底では、この

恐るべき両親を愛していたのだ。彼女はこのように自分の気持ちを確認し、ブルーストのマドレーヌを連想する。⁽²⁵⁾ この場面においても、「故郷再訪」は、日常的な時間の枠からしばし離れて、過去を顧み、現在の自分の位置を把握するという役割を担っていることがわかる。

ケイトをめぐる人物像の中で特異な存在は、兄のピーターである。幼い頃は兄を尊敬し兄によく面倒を見てもらったケイトだったが、彼女が仕事で成功し、社会的にも上昇したために、折り合いが悪くなり、兄は匿名の厭がらせの手紙を度々送って来るようになる。彼女は兄の行為に心を痛めながらも、結局その関係を改善するには至らない。小説の終り近くで、「過去は過去。修正はできないのよ」⁽²⁶⁾と述べているのは、過去を受け入れつつも、それにこだわらずに生きていくしかないという人生観の表われであろう。

『中間地帯』は、両親や兄という身近な人々に対する複雑な心理や、故郷を訪ねて過去を検証する過程など、他の小説と共通の要素が認められるが、子供に対する執着と懸念という新たな側面も見せている。自分が見る夢は、子供が窓から落ちる夢や妊娠している夢など母親的な心配に纏わるものばかり⁽²⁷⁾という言葉や、人生がこんなに幸福でなかったら、過度の愛情と感情的な依存によって子供を駄目にしてしまったのではないか⁽²⁸⁾という感慨は、親としてのあり方に不安を抱いているケイトの心情を語っているに違いない。そしてその不安感恐らく彼女自身の両親に対する屈折した思いに由来していることであろう。即ち、親子の関係をめぐる問題が二世代にわたって反復されているのである。またケイトは、現代の生活は余りに断片化しすぎていて包括的に捕えられない、情報が過多で加工する頭が無い⁽²⁹⁾と分析している。このように、個人的な感情においても、社会生活の領域でも、突破口の見出せない現代に住まう人間にとって、過去に遡って自らの出発点を探ることは、現在の生き方を見極めるうえで有意義であると考えられよう。

第十作『輝かしい道』は、精神科医のリズを中心に、大学時代の同窓生であるアリックスとエスタを交えた三人の女性をめぐって展開する。彼女たちが親しくなったのは、三人とも英国的生活の主流でないという意識していない共通項ゆえ（リズは母の狂気のため、アリックスは父の極端なイデオロギーのため、そしてエスタはユダヤ系亡命者の家系のため）であった。ドラブルの主人公たちは、その多くが人生において何らかの負い目または引け目を感じているが、この作品でも部外者的な意識によって結び付いた人間像を描いている。中でも最も興味深いのがリズの人物造形であり、母親に対する激

しい愛憎，亡き父親への幻想，子供時代の苦い思い出，故郷への嫌悪，そして子供達への執着など，これまで取り上げてきたあらゆる特徴を備えている。

リズの断片的な回想を再構成してみると，途中までは『黄金のイエルサレム』のクララに酷似した状況が浮かび上がってくる。架空の北の町ノーサム（クララの故郷と同名）で，エキセントリックな母親や活発な妹と共に貧しく重苦しい子供時代を送ったリズは，熱心に勉強してケンブリッジに入学し，それまでの閉鎖的な生活から一転して社交的となる。その後，自分の問題の必要性から精神医学を学ぶことにし，やがて婚約して故郷に帰らずにすむ。しかしこの結婚生活はすぐに破綻し，まもなく再婚，彼女は精神科医として，夫はメディアの仕事で成功して，ロンドンの高級住宅地ハーレイ街に子供たちと住むようになるが，この結婚生活も危機に瀕している。

小説はこの時点から始まり，日常の様々な描写の合間にリズの感慨や自己分析が折り込まれている。彼女は，時々義務感から故郷の母親に電話していたが，会いたくないどころか，むしろ早く死んでくれればと願っていた。そして，二度目の離婚に伴う身辺の変化について強い不安感を抱いていた。子供時代の貧しく惨めな日々を思い起こして，一步でも後退すればシンデレラのようにあらゆる富が崩れてしまうと感じ，自分が学位と才気で飾った偽のお姫様だとわかっていたので，離婚しても切り詰めた生活はすまいと決意する。しかし夫と別れると，紳士録から抹消され無名の存在になってしまうことを内心恐れていたし，貧乏暮らしから抜け出して遙かに立派な家に住むようになった身の上を思って，ハーレイ街の我が家に強い執着を感じている。また，自分が育てた継子たちとの今後の関係も気掛かりである。彼女は自らの不安を冷静に分析する。幼い頃から母親の存在に悩まされてきたので，いつか素晴らしい父親が現われて自分だけは救ってくれるだろうと期待したものだった。大学に入る頃には，父親像や自罰的欲求を忘れていたが，現在の夫は彼女の自虐性を呼び覚ました。リズは，想像上の自分を罰する父が夫に取って代わったことに気づいていた。父親のものと思われる写真の入ったロケットを手放せない彼女は，自分に何かを隠していることはわかっていた。そして前に踏み出すために，後ろを振り返って，一度は闇に葬った父の姿を掘り起こす勇気があるだろうかと思案する。⁽³⁰⁾ 自分の立場は根本的に誤りであると感じているために，父親のことを調べてみるべきだとわかっていたが，ひどく恐ろしかった。⁽³¹⁾ このように，リズは，狂気（というよりむしろ自閉症）の母と不在の父という二重の呪縛に囚われていて，それが現在の高い社会的地位と豊かな生活を裏側から脅かす形となっているのである。母親には

なるべく関わりたくないと願う反面、そんな自分の態度に罪悪感を拭い去れず、電話を掛けなければと何度も思いながらもつい掛けそびれてしまう箇所などは、母親という影に怯える強迫観念において、『黄金のイエルサレム』のクララを連想させる。

リズの妹シャーリは、もし故郷を逃れる幸運に恵まれていなかったら、こうなっていたに違いないというリズの別の姿と言える。近くに住む母親の面倒を見ているシャーリは、子供時代に従順そうであった姉が都会で贅沢な暮らしをして、自由になろうとした自分が子持ちの中年女として田舎で退屈な人生を送っているのは何か畏に掛けられたみたいだと思う。母に電話すらあまり掛けてこない姉の身勝手さに憤慨することもしばしばある。しかし、姉を許さなければと思い直し、母は無頓着で風変わりだったが、二人の娘を育て学校へやったことを思うと、娘たちが考えるほどには変でなかったのかもしれないと、受容の態度を示している。そして母親の狂気は知性の裏返しかもしれないと思うこともあるが、やはり母のようにはなりたくないと反発を隠せない。彼女もまた姉と同様に父親の写真入りロケットを身につけていることから、亡き父の幻想に囚われていると推察される。

久し振りに訪ねて来た妹から、以前は食べ物に無関心で痩せ細っていた母親が、過食のため肥満して殆ど動けないほどだと相談されたリズは、仰天して後ろめたく思い、近々様子を見に行くと約束するが、結局三年間行きそびれてしまう。その後、電話で母親の発作を知った時には、一瞬死を願い、故郷へと駆けつける。これが一回目の「故郷再訪の旅」となる。病院で半ば意識の無い見違えるほど太った母の姿を目にして、リズは、これは自分とは何の関係もないと思いつつも、やはり自分自身の姿だと考えずにいられない。⁽³²⁾ 彼女は妹と実家を訪れ、昔から見慣れた室内の情景を再び目にし、子供時代の惨めな日々を思い出し、母親が亡くなれば解放されるだろうと言葉少なに語り合う。遺書の入っているらしい机の鍵を捜すが、見つからない。二人は知りたくはない何かはどこかに隠されているのではないかと内心恐れている。小さい頃からよく磨かされた銀製の物がワイン・クーラーであったことに初めて気づく。⁽³³⁾ この後、母親は娘たちの予想に反して一度は回復するが、結局亡くなる。そして二度目の「故郷再訪」が始まる。

リズは一週間の休暇を取って、母親の埋葬の後、妹と実家の整理をする。遺書はすぐに見つかるが、机の引き出しに新聞の切り抜きが詰め込まれていることに気づいたリズは、妹に鍵を借りておく。翌日一人で調べに行き、過去の個人的な記録を期待していた彼女は、母が、子供に対する性犯罪に関連

した新聞の切り抜きを集めていたことを知る。浮浪者、変質者、自殺者の記事を読み、父親についての微かな記憶を辿っているうちに、激しく動揺する。しかし、これまでの歩みを振り返って自らを見つめ、父が誰であろうと、自分が誰であろうと構わないという結論に達する。そして、本棚で子供向けの入門書に目を止め、頁を繰っているうちに父親の膝の上でそれを読んだ頃のことを思い出す。⁽³⁴⁾ 翌日リズは気分が悪く、一日中ホテルで横になって、記憶を反芻して過ごししながら、次の日にすべてを燃やしてしまおうと考える。彼女は今までずっと悩まされてきた謎への関心を失いつつあり、もう過去を見るのはやめようと思うのである。

その後、遺言を作成した弁護士の後継者から、父親のアルフレッドは母と正式に結婚していたが、些細な性犯罪で逮捕されたこと、そして無罪となったが、まもなく自殺したらしいということを聞く。リズとシャーリは、新聞の切り抜きを燃やしながら、語り合う。

『輝かしい道』は、登場人物も多く、多様な要素を含んでいるが、リズに関する限り、これまで取り上げた主人公の典型的な状況がより深刻な形で反復されていると言えよう。彼女は、クララと同様に母親に激しい反発を抱いているのみならず、不在の父親に纏わる幻想にも怯え悩まされている。故郷に留まっている妹への後ろめたさも拭い去れない。即ち、二重、三重の家族の呪縛に陥って、身動きが取れない状況に置かれているのである。精神科医という職業を選んだのも自分自身の問題を解決する必要性からであった。彼女はその問題の核心にあるのは、亡き父親であることを冷静に分析している。神経症的な母親に対する失望と嫌悪は、不在の父親への期待と幻想を増幅させるが、一方で、肥大した根拠の無い願望は、限りない疑念や恐怖感へと転化し得る。リズにとって父親像とは、幼い頃には自分を救助してくれる者として待ち望み、成長した後は自分を罰する者として必要とした存在であった。実在しない父親は、彼女の内的成長に応じて、その姿を自在に変化させてきたのであるが、現状を打開するためには、過去に遡って、現実の人間としての父親像を検証する必要があると考えている。しかし、恐怖感に阻まれて直ちに行動には移せず、実際にそれが可能となったのは、母の死を契機にしてであった。そして、リズの過去への旅もまた、机や衣装戸棚の「最下段の引出し」に至る。バシュラールによれば、「戸棚とその棚、書物机とその抽出、箱とその二重の底は、秘密の心理生活の真の器官である」⁽³⁵⁾ という。即ち、亡き父親に関する真相は、リズの精神生活の原点に位置するのみならず、それを人目に触れぬように長く隠しておいた母親の秘密の心理生活を窺わせる証

拠でもある。クララと同様に、ここでも母と娘とは、その反目にもかかわらず、等質の存在であることが明らかとなる。しかし、リズはこの時点では母親との同一性を認識するまでには至っていないように思われる。彼女は、二度目の故郷再訪によって、長い間囚われてきた呪縛から解放されつつある。しかしそのためには、母の死を経験し、父親の実像を知るという痛ましい過程を経なければならなかった。そしてようやく、自分が誰であろうと構わないという心境、言い換えれば、現在ありのままの自分を許して受け入れようという姿勢に至るのである。

以上のように、ドラブルはその長編小説において、特定の心理傾向を持つ登場人物とその自己探索の過程を繰り返し描いている。まず、主人公たちは、極めて自意識が強く、そのために自己に対する過度のこだわりと不安に苛まれている。自分自身への分裂した心理は、両親や故郷という自己の分身に対する激しい愛憎へと転化する。ドラブルの小説世界では、家族の否定的な側面がしばしば増幅されている例が顕著である。それは、時には家族や家系の狂気という病的な形をとっている。従って、主人公の恋愛体験および結婚は、家族の呪縛から逃れるための有効な手段であり、自分の育った家庭環境とは全く異質の雰囲気魅せられる場合が殆どである。しかし彼女らは、どれほど故郷から遠ざかろうと、また貧困生活から抜け出して如何に社会的に安定した地位に就こうと、やはり、自分自身からは逃れる術の無いことを知っている。だからこそ、皆、故郷を再び訪れることになるのである。自分を許し、受け入れるために。

「故郷再訪」と「最下段の引出しにおける過去との遭遇」は、自己認識を導く主要な設定となっている。クララもフランスもリズも、一人で家の中に入り、一心に何かを捜し出そうとする。三人ともこの時点では何を求めているのかわかってはいない。これは、自己の深層に横たわる生の秘密の領域を探ろうとする内的な経験であるために、他の人間は一切排除されている。そこで見出されるのは、母親（もしくは大叔母）のかつての生の証とも言える個人的な記録であるが、主人公にとっては、現在と過去との測り知れない断絶を繋ぐ唯一の絆となり得る。母親像または故郷で過ごした日々は、自らの内の最も否定したい部分を体現している。自分の生い立ちや自分をめぐる偏狭な環境、独善的な価値観から、自らを切り離して解放されることを強く希求してきた彼女らは、今まで反発し嫌悪し逃れたいと願ってやまなかったもののとの密接な繋りを自己の中に見出すことによって、切り捨てることのでき

ない自分自身に気づき、自己の存在をようやく許せるようになったと言えるであろう。ジョアン V. クリートンは、ドラブルの小説の出発点を「自分の場所を探すこと」と述べている。⁽³⁶⁾ 引き寄せられるように、母親あるいは大叔母の机に向かい、その引出しの中を探った主人公たちは、究極的には自分自身の場所を探していたに違いない。そして、まさにそこで、彼女らは過去と和解する。肉親の夢、苦悩、悲しみを知ることで、痛みをもって過去を受け入れることを学ぶのである。

リン V. サドラーによれば、「過去を受容すること」がドラブルの主なテーマであるという。⁽³⁷⁾ ここで、この過去の受容が、常に母親（もしくは母親的な人物）の死を契機としてのみ可能となっていることに注目したい。クララもリズも、若き日の夢や希望について、あるいは父親の本当の姿に関して、母親に尋ねてみようとは決してしない。親娘の間には越え難い深淵が横たわっており、対話は初めから断念されている。この関係を修復し得る唯一の機会が母親の死であるとは何とも痛ましい結論ではある。母という存在を失うことによって、主人公は、自らの内面でも死を経験し、かつては見えなかったものが見えてきて、新たな生へと繋っていく、という意味で、これは、個人の内的経験における死と再生を描いているとも考えられよう。彼女らは自己探究の旅を続けて、母の死という大きな代償と引き替えに自分自身と和解するに至るのである。『輝かしい道』でリズは父親のことをあれこれ思いつつ、前に踏み出すためには後ろを振り返ってみなければ、と感じている。即ち、過去を辿り自分の原点を見極めることは、これからの生き方を探るうえで不可欠の行為なのである。ここから、文学における伝統を重視し、受け継ごうとする作者ドラブルの姿勢を類推することは、それほど見当違いではなかろう。伝統という、過去から連綿と続いてきた価値を見極め、これを受容することは、単に過去の砦を死守することではなく、現在置かれている状況を認識し、前に踏み出すために必要な唯一の方法と考えられているに違いない。

現代の社会はあまりに複雑化、細分化されており、個人の視野ではもはや把握することは到底不可能である。周囲の世界との有機的な繋りを見出せない我々にとって、いま一度自分が何であるかを足もとから見詰め、自分の生きる基盤を確認し、自己を再認識することは、この無定形な空間の中で、ささやかな生の場所を探し出そうとするためのひとつの試みと言えるであろう。

ドラブルの小説は、人間の生に伴う不可避的な葛藤を扱っている。登場人物たちは自分の属する世界と、憧れる異質の世界との強い引力に晒され、常に分裂した状態にある。これは、人間が生れ育った閉ざされた場所と、人間

が希求する開かれた場所との矛盾葛藤である。視点を変えれば、それは地方共同体的な文化圏と都市文化との対比であり、また、より拡大し抽象化すれば、自己と他者、あるいは、現実と理想との対立とも考えられるであろう。そして、それらの乖離を僅かなりとも埋めようとする試みが、ドラブルの作品世界の一端を構成しているのである。

注

- (1) Ellen Cronan Rose, *The Novels of Margaret Drabble* (Macmillan, 1980), p. 1.
- (2) 川本静子『ジェイン・オースティンと娘たち』(研究社, 1984), p. 172.
- (3) Margaret Drabble, *A Summer Bird-Cage* (Penguin, 1963), p. 16.
- (4) *Ibid.*, pp. 62-64.
- (5) Margaret Drabble, *The Garrick Year* (Penguin, 1964), pp. 80-81.
- (6) *Ibid.*, p. 115.
- (7) Margaret Drabble, *Jerusalem the Golden* (Penguin, 1967), p. 34.
- (8) *Ibid.*, p. 58.
- (9) (10) *Ibid.*, p. 165.
- (11) *Ibid.*, p. 187.
- (12) *Ibid.*, p. 189.
- (13) *Ibid.*, p. 191.
- (14) *Ibid.*, p. 195.
- (15) *Ibid.*, pp. 194-195.
- (16) *Ibid.*, p. 196.
- (17) *Ibid.*, pp. 196-197.
- (18) *Ibid.*, p. 201.
- (19) *Ibid.*, p. 206.
- (20) 鷺見・岡村編『現代イギリスの女性作家』(勁草書房, 1986), p. 273.
- (21) Margaret Drabble, *The Realms of Gold* (Penguin, 1975), p. 124.
- (22) *Ibid.*, p. 204.
- (23) *Ibid.*, p. 239.
- (24) *Ibid.*, pp. 303-310.
- (25) Margaret Drabble, *The Middle Ground* (Penguin, 1980), p. 117.
- (26) (27) *Ibid.*, p. 251.
- (28) *Ibid.*, p. 263.
- (29) *Ibid.*, p. 182.
- (30) Margaret Drabble, *The Radiant Way* (Penguin, 1987), pp. 138-145.
- (31) *Ibid.*, p. 171.
- (32) *Ibid.*, p. 304.
- (33) *Ibid.*, p. 314.
- (34) *Ibid.*, p. 386.
- (35) ガストン・バシュラール, 『空間の詩学』, 岩村行雄訳(思想社, 1969年) p. 116.
- (36) Joanne V. Creighton, *Margaret Drabble* (Methuen, 1985), p. 28.
- (37) Lynn Veach Sadler, *Margaret Drabble* (Twayne, 1986), p. 2.